

●妻の闘病を支える 二〇一二年一月～一八年六月

寒中の要精検からがん告知 妻より私の驚き重し

(二〇一二年一月六日横浜市の定期検診で要精検、一〇日東邦大大森で精検、一二日告知)

この日をば我は忘れじがん告知 妻振り返り我をば見詰む

帰り道妻の肩抱き我おれば 君の闘病大船の上と

手術の日芦屋より飛び来しわが娘 妻喜びて涙うつすら

(二月十一日入院、十三日オペ)

手術室開ければ八人整列し 妻を迎える一礼しつつ

麻酔より覚めたる妻は清々し もう済んだのと辺り見回す

病室に妻を見舞えば立ち上がり 今日退院と自分で決める

車乗り運転続ける我が妻は がんのことなど忘れたること

(二月二十一日退院、一週間後に車運転)

乳腺外科通いなれたる席なれば 髪なき人のおのずと見ゆる

×線治療の朝は六時半 家を出ずるも苦とは思わず

採尿採血点滴と 化学療法に耐えていく妻

点滴の終わるを待つ間この我は 流れる雲を見つめ続ける

マーカーが正常に戻れる結果みて 手を取り合って喜ぶ我ら

がんの本二十数冊読み込んで がん治療の「権威者」となる我

林檎人參ジュースにし 朝夕捧ぐ祈るがごとく

がんの本見向きもせずに我が妻は 「お任せします」と鼻歌交じり

スーパーで品定めする妻みれば がんの憂いは薄れゆくなり

鎌倉山ウオーキング止めて幾月ぞ 似たところあり港北歩く

綱島や日吉に続き港北も なじみの店の閉店続く

病む妻はなじみの店の閉店を わがことのように憂いて沈む

がんセンターセカンド・オピニオン不毛なり 三万取りて何ら益なし

トリプル・ネガはあきらめよと 言わんばかりの非礼なる医師

患者には医師の言葉は治療なり その一言が患者追い詰む

林檎人參に蕪加え 祈り込めつつジュースに精出す

慶応のキャンパス歩くその途中 背中痛みて妻うずくまる

急ぎ足家に帰りて鎮痛剤 そのままソファにうつ伏せとなる

マーカーが異常に高きその夜は 言葉少なく夕食終わる

(二〇一七年四月三日、マーカー急上昇)

PET 検査結果を見れば黒々と 転移の箇所がいくつか見ゆる

再びの×線治療痛みやむ 線量これで限界なりと

化学剤耐性できて効き目無し 他剤に変えても苦しむのみか

寒い日の告知の日よりはや六年 回復期待は幻なるか

かくなるはがんと共存目指すのみ 妻を励まし我も決意す

東邦の大森に通いて早六年 体力弱りて通院は無理

(東邦大大森病院には電車、バスで一時間以上かかった)

胸膜に転移し胸水溜まりせば 酸素吸入不可欠となる

(二〇一八年四月一七日、医師より酸素吸入の指示あり、翌日ボンベ到着、妻拒否反応)

転移して酸素吸入付けしより 妻の落ち込み大きかりけり

深夜二時苦しむ妻を娘らと 井田病院の救急へ急ぐ

(二〇一八年五月二十二日深夜、娘の車で川崎市立井田病院の救急へ)

入院し緩和ケア病棟心地よし 妻もしばしの安らぎ見ゆる

(井田病院の緩和ケア病棟はレベルが高かった)

朝娘午後我当番付き添いの 病院通いに心落ち着く